



誘惑プリンセスは
お丰胸ライですか？

小説 089 タロー

挿絵 ピエール☆よしお

立ち読み版

| | | |
|-----|---------------|-----|
| 序章 | 姫の護衛はできますか？ | 006 |
| 第一章 | 姫のお相手は困りますか？ | 018 |
| 第二章 | 姫の魅力に耐えられますか？ | 060 |
| 第三章 | 姫の本気に応えますか？ | 100 |
| 第四章 | 乙女な素顔は可愛いですか？ | 139 |
| 第五章 | 姫の熱愛は激しいですか？ | 196 |
| 終章 | 姫のお傍へ来れますか？ | 246 |

登場人物紹介

Characters



カレン

アイシスの護衛兼侍女。彼女自身も高位の家柄出身で、アイシスにとって教師であり姉のような存在でもある。頼れるクールなお姉さんだが、性的知識に関してはアイシスよりも詳しい。



アイシス・アスウルラント

とある小国の女王様。天真爛漫で好奇心旺盛。誰にでも分け隔てなく優しいが、少々天然ばい一面もある。一方で凛とした強さと気品を兼ね備えた、Fカップのバストも魅力的な銀髪姫。

たてばやしうへい 盾林擁平

元SPで現在外交官の父を持つ少年で、父を目標として目下修行中。真面目で頼まれるとイヤと言えない性格。

やつと唇を離れたカレンが興奮した顔で訊く。ギラギラと妖艶な眼差しに擁平は、はい……とだけ答えた。

「そ、そうか。なら、今度は大人のテクニックを見せてやる」

女の掌が焦れたように——だが少し震えて——少年の衣服を脱がせてくる。引き千切らなければにシャツを剥ぎ取ると、すぐにパンツもズボンと一緒にグイッ！と引き下ろしてしまった。

——つつビイイイイインっつ！

筋肉のついた腰の上に、力強い一本の肉塔がそり立った。

まだ女を知らぬものの猛々しさは十分育った雄の性器である。鍛えられた肉体同様、異性を黙らす力を持ったソレは、歴戦の女護衛をも怯ませた。

「ううっ!? お……おおきい……！ ふ、フツツ、こんなに男らしくなっていたとはな。大丈夫だ、任せろ。すぐによくしてやる……！」

しばし驚いていたカレンだったが、少年を押し倒すと横に寄り添い、そつと肉幹に指を絡めた。

——ふわあつ、きゆきゆっつ。

「ううっ!? カレン、姉さんっ」

「んんっ？ あ、熱いっ。コレが、擁平……っ！」

細い五指が絡みつくくと、心地よい性感がサオ全体に広がってきた。少し汗ばんだ掌の体温は妙に刺激的で、すぐに性神経は熱を上げてくる。

そして指がゆつくりと上下すると、痺れるような快感が少年を喘がせていった。

——スリっ、スリっ、クイっ、クイっ……。

「ああっ？ あ、ううっ。き、気持ちいいっ」

緩く握られたペニスが、美女によって優しく擦られていく。

ほんの少し躊躇うような仕草はあるが、熱い肉棒を握る指は、優しく上下動を大きくして勃起性感をジリジリと高めてくれる。

(し、信じられない。あのカレン姉さんに、おちんちんシゴいてもらえるなんてっ)

仕事のできそうな女性とは、得てして男からは近寄り難く見えてしまうものだ。カレンもまたそれに近かったが、こうして男根をシゴく様子は、驚くほど男心をくすぐった。

しかもそれだけではない。擁平の喘ぎに気をよくしたのか、彼女は舌を伸ばして胸板に迫ってきたのだ。

「はああ、はああ、い、いい反応だ擁平。つもつと、気持ちよくしてやる……」

——ちゅっ、ぺろぺろっにゆるっ。

「あ!?! あああっ！ そんなくち、乳首いいっ！」

厚くはないが鍛えられた胸板、その数少ない弱点でもある濃いめの肉粒を、女の舌が舐

め上げてくる。するとビリリっ！ とした快感が胸の性神経を刺激した。

（そんな、乳首を舐められて気持ちいいなんて!? 僕、男なのにつ!）

こんな快感はもちろん初めてで、戸惑いながら悶える全裸少年。

濡れた朱肉にヌルヌル刺激されると、不思議な愉悅が背筋に響いてくる。さらに乳首を吸い上げられると、寒気に似た甘い痺れが五感をウットリと蕩けさせた。

「っああ、はあ、はあ、カレン姉さん、気持ち、いいですう。おちんちん、乳首いつ」

「はあ、はあ、んフフ、そうだろう？ 男だつてココはいいんだ。もつと感じて……!」

上目使いの美女の瞳が今は恐ろしく艶かしい。汗を吸った茶髪が額に張り付き、濡れた色気を感じさせた。伸びた舌は妖艶に胸板を滑っていき、貪欲な雌を印象づける。

片手で男根をシゴき上げつつ、舌はもてあそぶように胸や乳首を舐めていく。仰向けの男を横から貪るその姿は、どこか淫媚な女豹を思わせた。

（すぐく、エロいよ姉さん！ 僕、姉さんを女としか見れなくなるっ!）

喘ぐ少年の主観が変化していく。彼女を——性器を向けるべき相手と認識する。

薄いシャツの胸元では、ノーブラの乳房がぶると揺れて雄の視線を煽ってくる。豊かな臀部の女豹のダンスが、肉欲と射精欲を沸々と漲らせてくる。

おかげで勃起はますます硬化し雫を垂らして絶頂へと駆け上がっていく。

「こ、こんなに濡らしてっ。はあ、はあ、硬くなつて、出したい？ イキたいか？」

——チュプチュプチュプっ！ ヌチュヌチュキュッキュツ！

美女の手淫が勢いを強め濡れたカリをも熱く擦り上げていく。エラに指が引つかかかって激しく擦れて気持ちよく、みるみる射精感が高まっていく。

「うううっカレン姉さんっ！ 僕！ 僕もうっ!!」

シゴかれるたびサオが快楽で膨張し、ビクビク震えて漏れそうになってくる。エラもますます大きく開き心地よい限界を悟っていた。

「いいぞ！ イけ！ イつてもいいぞっ！」

カレンも熱っぽい眼差しで絶頂を誘ってくる。悶えるペニスを一気に追い詰めてくる。そして又める細指が輪を作り、きゅきゅっ、と傘裏を刺激すると、

「あう!? あうううううううっ!!」

——びゅぶっ!! びゅびゅううううっ!!

とうとうペニスが限界を迎え、擁平は気持ちよく精液を撒き散らしていた。

腫れたカリの先から、びゅっ、びゅっ、と飛沫が上がる。初めて女性に導かれた性感は、夢のような愉悦と共に辺りを白く染め上げてしまう。

「ふう、ふうっ。で、出たな？ 気持ちよかったのだな？」

「は、はい……」

果てた擁平は、もう何を言っているのか分からない。快感で腰が悦ぶのに、意識が夢現ゆめうつ

で理性が霞かすんでいるのだ。

だが、少年を導いた美女は少年の欲望をちゃんと分かっているらしい。指についた精液を興奮の眼差しで見つめた後。身を起こすと、スパッツの股間にグッと指を引っかけた。

——ビリっ、ビリビリっ！

薄い生地が容易たやすく破られ、股間部分だけが丸く穴を開けられる。内側からは、やや白い太腿の付け根と薄紫のショーツが見えた。

(色っぽい下着だ。アダルトで、ヒモみたいで……それに、濡れてる?)

花柄のあるシースルーな下着だった。俗にタンガと呼ばれる面積の少ない代物である。その細い股ぐりの部分は透明な粘液で湿っていて、少し肉のひずみが見えた。そして妖艶なデルタショーツが横にずらされると。

——ピラッ、ヒクン……。

(あ、あああっつ！ か、カレンさんの、アソコだっ！)

下から現れたのは、くつきりと縦割れた大人らしい膺唇だった。白い二つの肉丘の間に朱色の粘膜を覗かせていて、上端では小さな肉芽が可愛らしく震えている。

まるで美しい薔薇のような秘所である。しかも淫行で上気したのか薄く蜜で濡れていた。

「き——綺麗、だ。カレンさんのソコ……！」

「ば、ばか……っ」

女の花弁も羞恥に合わせてヒクリと動く。周りは茶色の淫毛で覆われ、濡れたその茂みの奥では数枚のシワが見え隠れするのが、また堪らなく妖しく官能的だった。

入れたい。あの中に！ 強い肉欲が勃起を支配し、みるみるうちに硬度を回復していく。「ああ、っ待っている。いま……入れてやる……」

雄の視線で落ち着かなくなったのか、カレンはサッと仰向けの腰を跨またいできた。

そのまま腰を落とし、やや強引に亀頭が膣口に飲み込まれる。

「うっ!? くくう……!!」

「か、カレンさん？」

ヌルリとした感触が肉先を包み、震えそうな快感が走った。睾丸も脈打って童貞喪失を予感する。

が、入り口付近で微かな抵抗にあったのだ。薄い肉の壁のような、責めれば突破できそうな柔らかくて気持ちいい弾力感に。

そしてカレンの呼吸が僅かに詰まっている。

「だ、大丈夫だ、予想より、大きいだけ……!!」

何かを堪えるような彼女の表情は、妙に悩ましくて愛おしい。しかしスパッツ腰が、押し付けるように落とされると……。

——ズブズブウ……つつつツピッツ!

「あうっ!! はあああああ、っっっ!」

不思議な抵抗感を突破して、ついに男根が根元まで飲み込まれてしまった。途端、官能的な悲鳴が双方の口から漏れ出ていく。

(うう!? き、気持ちいいっ!! や、柔らかいお肉がおちんちんに吸い付くうっ!!)

初めて味わう女陰の感触に深い歓喜を隠せない擁平。

性器を覆いつくした膣粘膜は、細かいヒダと粒の増^{つぼ}増^{つぼ}だった。まるで快感を与えるためにだけに創られたような、神秘的かつ気持ちよすぎる乙女の秘奥である。

中は強いヌメリで擦れる痛みなどまるでないのに、そこに在るだけでヒダに優しく撫でられていく。入り口付近は実に快^{こころよ}い締めり具合で、男の到達を歓迎するかのよう。

(こ、これが女の人、カレンさんのオマ○コっ!!)

童貞を捧げた少年は、仰向けのままひたすら肉の悦びに打ち震える。ペニスを包む甘い感触に心の底からウットリしてしまう。

と、跨がった美女を見やると——彼女は呼吸を整えながら、汗を浮かべて微笑んだ。

「どう、だ、女というものは? 気持ちいい、だろう?」

「は、はい、最高ですうっ」

確かに、このヌメリと締め付け具合は勃起にとって至福だろう。男が獣になるのも領ける。こうして繋がっているだけでも自慰とは比較にならない気持ちよさなのだ。

だが、カレンのほうは少し辛そうだった。自ら男根を受け入れたのに、時折歯を軋ませ
て動かない。

「あ、あのっ、カレン、さん？」

少し気になってきて少年は声をかける。初めてのセックスで自信がないのだ。
するとカレンは、涙ぐんだ瞳で見下ろし、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「はあ、はあ、ま、任せろ。あうっ！ すぐにイカせてやる……っっっ！」

——じゅぷりっ、じゅぷりっ。

「あう!? あうっ！ あううっ！ おお、気持ち、いいっ！」

どこかぎこちない上下運動である。それでも、初の抽送行為は物すごい快感で思わず擁
平は呻き声を上げていた。

ツンツンとつつく肉ヒダが、今度は動きながら表面を撫でていく。濡れた肉に舐められ
るような感覚で、一気に射精欲が高まってしまった。

「ああああ！ お、おちんちん、搾られてえ、つつ！」

まるで搾乳されるかのように。余すところなく全体を包まれて、優しく搾り取られる感じ。
けれど痛みなどまるでなく、温かい膈粘膜にただただ勃起快感を高められていく。

「はあ、はあ、んっ！ どうだ、んっく、気持ちいいか？ わたしの、中はっ、んうっ！」
腰振るカレンの声は、途切れ途切れで普段の彼女らしくない。それでいて、赤い唇を開

いて熱い呼気にまみれる姿は、とても淫らで——ますます味わいたくなってしまふ。

「か、カレンさん！ 僕、ぼくっ、動きたいっ！」

——ずんんっ！　じゅぶじゅぶぐちゅぐちゅむずむずむんんっ！

「はあっ!?　うああああうううっ!!　よっくく擁へえええっ!!」

あまりの快楽に気が急いで、ついに自ら膣内を責め立ててしまふ興奮少年。

雄腰が突き上がり女を高く跳ね上げる。鍛えられた肉体は獣性を得て、女体を雄々しく求めうなる。

そして責めを負う美女は、跨がったまま激しく身をくねらせた。

「ううっくうっ!?　はあっはあっ！　こ、こんくくようへえ、つ強い……あ、熱っ……!!」

肉付いた太腿が、臀部が跳ねて汗を散らし、細い腰が悶えるように振れる。スパッツの丸い穴奥では、タツプリ濡れた膣唇がサオに激しく出入りされていた。

そして欲望に突き動かされるまま、擁平はカレンのシャツを捲り上げた。下からは形よいお椀形のバストがぷるりんっ、と可愛く躍り出た。

(カレンさんの、オッパイっ！　揉みたいっ！)

掌サイズの綺麗な丸みを両手でわし掴みにする。可愛く尖った乳首に魅了されつつ、思うがままムニムニと揉み込んでいく。



「そして、擁平はすでに覚悟を決めており、また美しい恋人も、最後の一线を越えることを自ら求めてきてくれた。」

「はあ、はあ、よ、よう、へい。わ、わたくしを……っ、抱いて、ください……」

「脱力しシートに溺れた魅惑の肢体。特大のFカップ乳房は荒い呼吸で淫らに揺れて愛雄の視線を誘う。細い腰も切なくくねり、引き寄せられるのを待っていた。」

「何より、清い下腹の奥、濡れそぼった大切な秘孔は、桃の花弁を淡く花開かせて、『女』にされるのを強く望んでいた。」

「（色っぽくて、魅力的でエッチな身体で……でも純情で、ずっと僕を待っていて……）一時でも敬遠した自分が腹立たしい。そして今は、想いに応えずにはいられない！」

「そっと仰向けに寝かせてあげると、すでに濡れそぼったショーツも脱がしてあげる。汗と愛液に濡れた、真正正銘、生まれたままの愛しいプリンセスがベッドに横たえられた。」

「細腰を引き寄せて脅えさせないように太腿を開く。銀の恥毛が守る秘裂に、優しく肉先を添えた。」

「ゴクッ。い、いい？ アイシス」

「はい……キテ……っ」

「恐れなのか緊張なのか。いよいよの時には、しおらしくて女の子らしい可愛い彼女。それを一層恋しく感じながら、少年はゆっくりと腰を進める。」

——つぷちゅつ。ぬぷ、ぬぷぬぷ……。

「つふうつ——？ は、入って……！」

まずは鈴口でのソフトキス。次いでキスが深くなり、亀頭が少しずつ埋め込まれていく。狭い入り口を割っていくと、濡れた粘膜にカリが温かく包みこまれる。が、すぐに絞るような甘い弾力に先端が遮られた。

「つつうつ！ はあ、はあつ、よ、擁へえ、そ、ソコはあ……！」

徐々に深まる結合感に少女は微かに身動きみじごする。振れる腰をそつと掴みながら少年もまた彼女の処女性を実感した。

（ああっキツイ。アイシスも辛そうだ。こ、これが、処女膜？）

柔らかく塞ぎ止めるような、触れるに優しい薄壁である。以前にも感じた記憶のある、心地よい弾力ある濡れた肉の感触だ。

だが、これを破れば痛がるに違いない。少しでも気を紛らわせてあげようと、苦しそうな恋人に、少年は深く口づけていた。

「んっ？ ちゅうつ。クチャつ、ああんっ……ようへええ、んんっ」

浅く舌を入れてあげると汗ばむ太腿から力が抜けた。逆に入り口がヒクンと震えて、招くような動きに変わる。

キスをしたまま軽くカリを回すと、恋人の喉から悩ましい鳴き声。そして、エメラル

ドの瞳がトロンとしてきたところで、濡れた処女膜を一気に突いて――。

――つぶちつつ！

「んひい――っ！ 痛……っ。あ、はああ、つつ！」

弾けるような感触と共に、処女の蜜壺から抵抗感が消え失せる。入り口からは恥蜜と一緒に、赤いものが一筋、ツ……と伝い落ちた。

そして奥に入った肉棒は、温かな処女腔に、ふわりと優しく包まれていた。

(き、気持ちいいっ。アイシスのオマ○コって、すごく柔らかい……！)

ついにもらえた夢の処女に、擁平は感動を隠せない。それに人生二度目の女性の胎内は、若いペニスには身震いするほど快感だった。

だが、破瓜はかの衝撃に歪んだ恋人の顔を見ると、素直に動くことはできない。

「だ、大丈夫？ やっぱ痛い？」

心配が先に立ち、つい無粋なことを訊ねてしまう。すると――銀の美少女は、うっすらと臉を開き首を振ってくれた。

「……はあ、はあ、クスッ、平気。だって……わたくし、これで本当に擁平の女になれたんですもの……！」

あ、アイシス……！ と絶句してしまふ挿入少年。痛みを堪えた弱々しい微笑みに、再度心を奪われていく。

細いお腹を上下させる呼吸は荒く、懸命に痛みを我慢しているのが丸分かりである。目尻からも真珠のような雫が伝い落ちていた。

それでも、自分に初めてを捧げたことを心から喜んでくれる彼女。その健気さと純心さに、男心の深い部分がグラグラと揺さぶられる。

(アイシス、僕、僕はキミがつ)

「——あ、愛してる。愛してるよアイシス。ずっと好きだった、ほんとは、ずっと抱きたかって思ってた！」

よ、擁平……！ と、今度は恋人が絶句する番だ。

鼻先で熱く想いを語られ、目を見開いて愛雄に釘付けになる。黒い瞳が語るのは、欲情ではなく——純粋な恋慕だ。

そして、上から想いの丈を降らされると、驚いたように身悶えした。

「アイシス好きだ！ ちゅっ！ ちゅっちゅっ、ぷちゅぷちゅっ！」

「んひゃんっ!? あっあっ！ ようへえ、そんな——いやんっ！」

愛情溢れた少年が、首筋や鎖骨に雨のようなキスを撒いたのだ。美少女の裸体が広い背中
中に覆い隠される。

だが、破瓜に苦しむ処女には効果観^{てきめかん}面^{めん}だった。愛撫で敏感にされた肌は、想い人の唇感
触で早くも快感に染められていく。

また少年も、繋がったまま甘い香りと味を堪能しつつ、情熱的なタッチで恋人を感じさせていく。

「はあ、はあ、キレイな肌、甘いよ、ちゅっ。スベスベでいい匂いだし、オッパイだってこんなに柔らかい」

両掌でバストに触ると、わざと官能的にたっぷんたっぷん揺すつてみせる。さらに羞恥を強めてから、今度は乳首に吸い付いてみせた。

「ひゃうんっ!! ああ恥ずかしいっ! でも、でもお、き、気持ちいいのお……っ!」

もうアイシスは、快感をそのまま口にするようになっていた。それが嬉しくて、なおも唇で責めてあげる。

——ちゅっちゅるっ! ぷるぷるもみもみ、ぺろっ、つつうう……。

「ひゃあああああんっ! ムネの間、舐め——あ、ああ、か、感じちやううっ!」

深い谷間をゆっくり舐めると、か弱い腰が悩ましくしなる。それでもやめずにじっくり舐めると、白い裸身がピクピクと身悶えてくれるのだ。

大きく弓なりになって胸と腹を愛でられる、何とも美しく淫らな肢体。銀の長髪も豪奢に広がり、後光のようにキラキラと輝いていた。

（ああ、ステキだアイシス。こんなに色っぽく感じる姿……僕だけだ、僕だけが知ってる!）
学園でも穏やかで誠実で、人当たりもよく人気者になった異国の美少女。そんな彼女が

ベッドの中でこんなにも悩ましく悶える姿など、自分しか見ていないに違いない！

「アイシス、ああアイシスうっ！」

もう、我慢の限界だった。恋慕と肉欲が深く溶け合って、彼女を芯まで独占したくなる。硬い分身で、隅々まで自分の女にしたくなる。

だから、これまで我慢していた抽送を少しずつ開始していく。

——ちゅぶつつ。ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶちゅぶじゅぶじゅぶ……！

「んあつゝはああ……っ！ よ、ようへいの、熱いのが……っ！」

いよいよ始まった性器での愛撫に、処女の臀部がわなないていく。朱色の美顔にも戸惑いの色が浮かび上がった。

けれど——汗ばむ頬に苦痛はない。むしろ自身でさえ戸惑っているように、

「はあああ、はあああ、よ、ようへいを、感じる……あ、熱くって、硬くって、す、すぐ……！」

と、官能の吐息を漏らすようになっていた。

豊かな臀部を優しく腰打つと、パチンつと弾けて汗を垂らす。硬い勃起をそつと引き抜けば、細い腰が甘く振れた。

たわわな乳房も上下に揺られて本番行為を熱く演出する。肌も色づき扇情的で、瞳は不思議と夢見るように霞んでいく。

そして何より、締め付けるばかりの処女膣は、徐々に優しい粒ヒダ愛撫を始めてくれた。
いた。

「気持ち、いいよ。アイシスの中、手前と奥、別々に動いてて……っ！」

入り口は狭くて抜こうとすると締まるのに、奥のほうは逆にふわふわで真綿のように柔らかい。その上ヒダの動きはとて繊細で気持ちよく、一枚一枚が丁寧なペニスに絡みついてくれた。

そんなステキな処女膣愛撫は射精欲を高めてやまない。それに隠れた彼女の優しさを感じるように、ますます勃起が昂っていく。

「ああアイシス、アイシスっ、好きだ、気持ちいいよ、僕はあっ！」

沸々と情熱が煮え滾り、腰はどんどん加速していく。目の前の姫が欲しくて堪らない。

——じゅぷ、じゅぷじゅぷ、じゅぷじゅぷぐちゅぐちゅぱんぱんぱんっ！

「はひゃううっ！ つはあはあはあっ！ らめえ、らめっ、そんっ、強い——っっ！」

「ごめん！ でも止まらないんだ。アイシスが好きな、止まらないんだっ！」

勢いづいた腰がなおも抽送を速めていく。少女の媚腰がパンパンと弾ける。ベッドが軋みを上げて寝室を官能の音色に染めた。

「ひいらめえっ!? おなかつ、ナカがよくって——わたくし、わたくしいいっ!?」

ついに——処女の唇から膣の悦びが漏れてしまった。これまでねちっこく開発された性

感が、深い女の悦楽を目覚めさせたのだ。

おかげで処女膣は、ますます濃密に絡みついていく。愛する彼のために、ペニスを愛でる柔らかい蠕動を魅せていく。

(すごい！ どんどん吸い付いてきて、さっきより気持ちよく——！)

入れれば入れるほど乙女膣は柔らかくなり、満遍なくカリに触れるようになる。表面が全部舐めるように刺激されて甘い膨張感が抑えきれなくなる。

また、エラで擦るたび、ヒダヒダも入念に擦り返してくれる。サオも情熱的にシゴかれ、こみ上げるものももう止められない。

——ぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶばんばんばん！ ちゅちゅつづむづちゅちゅんつつ！

「ひゃあああううううつらめええ!! よおへえつもおつわたくしいいっ!!」

限界に迫る雄々しいスパートが恋人の姫を熱く追い込んでいく。少年の腰が激しく動いて悶えるヒップを強く叩いていく。

「はあはあはあはあっ!! 僕も、僕ももうすぐダメになるううっ!!」

同時に清い胎内も男を官能の渦に巻き込んでいく。今や処女の肉ヒダは深い挿入にすっかり蕩けて、痺れるサオをより滑らかにスムーズにシゴき上げていく。

すでに女体は悦びを隠しもせず、シーツの上でがつくんがつかんと悶え跳ねる。腰が振られ、太腿が躍って雄腰を強く啜え込む。色づいた巨乳もぶるんぶるんと盛大に揺れて、そ



ええっつ!!」

「またも裸体が大きく跳ねてつややかな媚腰が高く掲げられる。それはまるで、注がれる精液を本能的に飲み干そうとするようだった。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……! あ、アイシス、出る、出てるうっ!」

「はあっはあっはあっはあっ! かあ、感じるウ、よおへえの熱いの、おなかいっぱいいい……!」

「大股を開いて精液を飲み続ける、全裸で、淫らで、しかし美しいプリンセス・アイシス。その膈奥に、びゅっ、びゅっ、と残滓ざんしを注ぎ込みながら、擁平は全身が麻痺したような恍惚に酔っていた。

「あああ、アイシス……大好き、だ……!」

その後。随分時間が経ってから、ようやく二人は身なりを整えた。

「あ、あのっ。ごめんなさい擁平、本当は安静にしてないといけないのに、わたくしったら……!」

「い、いいってそんなの! 大した怪我じゃないんだしさ!」

モジモジしながらアイシスが謝る。擁平はベッドの中で大いに照れてしまった。

確かに擁平は頭に包帯を巻いたままで、今日一日は安静にと医者にも言われていた。し

かし本当に大丈夫なので問題はない。

「そ、それに……アイシスの介抱、すごく気持ちよかったし……」

「!! も、もうっ、擁平ったら……っ」

なおも赤面する彼女が、再会した当初からは信じられないほどいじらしい。あれほど誘惑していたのに、肝心な部分では初心な面など、思わず抱きしめたくなるくらいだ。

「そ、それじゃ、もう行くわね？ カレンが来ちゃうと大変だし……」

場の空気にすっかり照れてしまい落ち着きなく部屋を出ていこうとするアイシス。

だが、最後に一言、ちよつとした棘だけは残していく。

「わたくし、カレンのことも大好きよ。でも、擁平だけは……譲れないからっ」

ドキッ！ とする少年を残し、彼女はドアの向こうに消える。

(やっぱり……カレンさんとのコトは、ちゃんとバレてるんだな……)

自覚すると確かに呼び方が変わっていたし、ひそひそ話を聞かれたのなら当然だろう。

(どうしよう。カレンさんも魅力的だけど、やっぱり本気なのは……)

などと、一人擁平が物思いに耽っていた、その時。

——コンコン。

「？ はい、どうぞ？」

「入るぞ、擁平」

（もう、限界っ！ カレンさんの全部を、僕のものにっ！）

自分に堕ちた心の姉を、芯まで虜にしたくなる。クシヤクシヤになった彼女の涙顔に、擁平は最後通告した。

「カレンさんっ！ 僕のこと好き!? 中で出しちゃっていいっ!？」

「いいいっ！ 好きいいいっ！ ヒイっヒイっ！ にやか、にやかにいいいっ!？」

だらしなく舌を垂らすカレンが堪らなく可愛く感じて。

ようやく彼は目いっぱい腰を叩き下ろし——ズシンっ！

（くううっ！ イクううっ!!）

——どびゅううっ!! びゅびゅううっ！ びゆるびゆるびゆるぶぶっつバシヤああっ!!

「いっくヒイヒイヒイにやかにヒイヒイ!!! イグっつにやかイグううううんんっ!!!」

肉撃を受けた女が二度目の絶頂を味わった。真上からの子宮責めで、壊れたように手足をバタつかせる。

「ヒイ、ヒイ、ヒイ、はヒイ、はあ、はりやあ、いっはいいい……!!!」

激しく痙攣するカレンだったが、深い深い結合に屈曲させられて快楽を逃がすこともできな。雄の重みを受け止めながら、タツプりと子宮を子種で満たされていく。

そして肉の杭が引き抜かれると、支えを失ってバツタリと絨毯に伸びてしまった。

「はあ……はあ……よかったです、カレンさん」

大の男を圧倒する豪傑美女が、こうも無力に抱かれてくれる。実感すると妙な優越感が湧いてくる。

（恋人はアイシスだけど、カレンさんも手放したくないな）

などと、一人物思いに耽っていると。

目の前がフワツと銀色に染まり、胸に柔らかく温かい感触が。

「はああ、はああ、よ、擁平……わ、わたくしも、お……おま〇こが、熱いのっ」

だからお願い……と切なく願うのは、すっかり出来上がった朱色の美姫。いよいよ媚薬が浸透したのか、呼吸が荒く肌は上気し、自ら股間を押さえて腰躍らせていた。

そしてカレン同様、もう我慢できないといった風にドレスを脱いでしまう。引き抜くように脱いだ胸元は下着さえ一気に剥ぎ取られて。

——ぶるるんたゆゆんっ！

ストラップレスのブラが落ち、はち切れんばかりの乳房がまろび出る。Fカップもの乳肉はまるで垂れを知らず、美味そうに揺れるプリンのようなヴォリューム満点の美しさ。

次いで現れた下半身にはガーターベルトにストッキング。紐パンも含めた純白セットは大人の魅力満載だったが、紐が解かれショーツが抜き取られると、途端に一変して淫媚な裸股となった。

「っ！ キレイだアイシス。美人だし、胸もお尻も大きくって……」

「わたくしも好きいつ。だから、は、はやくう、擁平のおちんちんちようだあい……！」
もはや王女たる威厳もなく、自ら男を求める銀髪で翠の目の美少女。くびれ腰も切なく震え、目尻はすっかり蕩けている。朱に色づいた爆乳は食べ頃果実のように恋人少年を誘い、尖った小粒は勃起みたいに興奮を物語っていた。

ガーターベルトとストッキングのみの、扇情的すぎる若い女体。その尻が背後の机に浅く乗ると、自らの指が股間に添えられて。

——くばああ……つ。

（おおお！ アイシスのオマ○コが丸見えつ！ あんなにグシヨグシヨになつてつ！）

ぬちゃりと滴る水音と共に、少女の媚粘膜が開かれる。ずぶ濡れの入り口は膣孔どころか尿孔さえも魅せつけて、雄の性器を再燃焼させてみせた。

またも欲情した少年は鼻息荒く、夢遊病もかくやと歩み寄る。机にもたれるようにして股開く乙女の秘孔に、ゆっくりと興奮を埋めていく。

——ずぶつ、ずぶずぶずぶつぶつぶちゅうう……つ！

「あつはああ……つ！ よ……ようへえの、おちんちんつ、いいいつ。おま○こ、気持ちいいのおお……！」

対面立位で繋がった姫が、何ともはしたない悦びを示す。高いソプラノにつやが混じって少年の獣性を刺激した。

「うう！ あ、アイシスの中、もうトロットロっ。気持ちいいっ、動くよ？」

赤い美顔がカクカク首肯し眉根が悩ましく寄せられる。堪えるような様子がまた可愛くて、すぐにも腰が抽送を開始した。

——じゅぶっじゅぶっじゅぶっじゅぶっ、ばん、ばん、ばん、ばんっ！

「ひいああんっ!! ひんっ、ひいんっ！ ようへっ、おま○こっ、気持ちゝゝっ!!」

一突き一突き、じつくりと腰振ってあげると、豊かな媚腰は美しく弾けて汗を散らす。透明な飛沫が広い室内で刹那の宝石となった。

けれど乙女の股間は実に淫らに穿たれていた。精液まみれのペニスが入りして中の粘膜をかき出し、また音を立てて埋め込んでいくのだ。純な性感帯が丁寧に擦られ、少女のくびれをウツトリと振らせる。

「はあ、はあ、き、気持ちいいよおお……!! よおへえのお、硬くて、熱くてええ……!!」
美しい姫君がひたすら愛雄にくびつたけになる。雄々しく女脛を開拓されて涙を流して悦びに浸る。

もつとも少年とて、責め立てつつも自身も責め抜かれていた。十分に蕩けた恋人の膣肉は、トロふわの柔らかさで丹念に勃起を甘擦つてくれる。

「くうっ気持ちいいっ!! はあぁっ、おちんちんがっ、溶けそううっ」
まるで心地よすぎる溶鉱炉のよう。芯まで染み渡る極悦なのに入れれば入るほど感覚を失

う。なのに分身は硬度を増して、熱い肉ヒダを美味そうにかき出すのだ。

おかげで腰がブルブル震え、次第に見境を失ってしまう。媚薬なしなのに暴走して、ついに裸体に貪りついてしまった。

「アイシスうつ!! はあはあアイシス、アイシス好きだあつ!!」

「きゃああああんんつ!! よおへえそんな、ムネえっくはうううんつ!!」

——ちゆううつ! もみたぶぬちゆりつ! ぺろぺろっぐちゆうちゆうつ!

強烈な抽送と共に躍る爆乳にしゃぶるようなキスを降らす。たわわな果実を両手でむちむちと揉み搾りつつ、勃起乳首を思いっきり吸い上げる。乳肌は一気に色味を増して狂ったように揺れまくった。

さらに脇や首筋にも執拗に口づけ、吸い付く心地よさと甘いミルク臭で本能を焦がしていく。徐々に赤いキスマークが浮かび、自分の女だと強く実感させていく。

もちろん勃起もきゅんきゅん締まる膣内を思う存分味わっていく。暴れるように角度を変え左右の柔ヒダを刺激しては、一緒に悶えつつ彼女を追い込んでいった。

「はあっはあっはあっ! そんな、色んなトコっ!! はげ、はげしっくもおらめよおへえ、なかあ、なかあぞくつてえ、ぞくぞくつてえええええ……っ!!」

懸命に責め従順に受けるアイシスは、ビクビク悶えながらも決して少年を離さない。長い美脚で盛大にM字を描き、ヒクつく媚腔で男根を受け入れ続ける。机に助けられつつ、

いつしか駅弁スタイルに近くなっていた。

結合部は粘液まみれで卑猥なまでに白く泡立つ。恥毛が触れ合い絡まるほど濃厚なセックス。また互いの腰も壊れそうなほどぶつけ合って、ヴァギナとペニスに深い愉悦を叩き込んでいった。

「はあっはあっはあっ！ 僕も、僕ももうすぐう……!!」

二度も果てた性感がまたも心地よく沸騰してくる。恋慕と性愛がない交ぜになって、ただ——彼女の中に在り続けたい。

そして恋人も、彼の想いに甘く応えてくれた。

「いっ……いいのお!! なかにい、なかにらしてええっ!! よおへえのせえし、わたくしのなかにい、っ……っ!!」

美脚がギュッと腰に絡まり恍惚の膣内射精を促してくる。膣に柔らかく締め付けられつつ、カりは子宮唇に優しく暖かく触れられていた。

「うぐうう!! いいっイクうう——!!」

優しい口づけに鈴口が蕩け、カ리가根負けする。と同時に、擁平はギュッと、と乳房に締めつけた。

——つぶびゅううううううっ!! びくびくぶきゆるるるううっ!! ばしやばしやびちやびちやっ!!

「本日三度目の絶頂が三度^{みたび}白い飛沫を散らす。それは歳頃少女の奥深くに強い性刺激となつて流し込まれ、

「ふやああああん出てるうううっ!!! キチャウ! おくキチャウうううううっ!!!」
強い媚電が清い胎内を性の愉悅で染め上げる。愛雄の射精が子宮を子種で悦ばせたのだ。乙女の本能が白く満たされ満足感が胎を埋める。

「あ、ああ、ああんっ。き、も、ち、いいい……オナカいっぱい……すごくう、いいのおおっ」

ビクビクと感電した後、はあつと感嘆のため息をつく。胸も臀部も震わせて幸せそうな全裸の美少女プリンセス。

一方、解放の済んだ少年の腰は、さすがに悲鳴を上げ始めていた。あまりの連続射精で本当に腰砕けそうなのだ。

(も、もうムリっ。おちんちん感覚がなくなっちゃって)

僅かな時間で立て続けに三度も射精したのだ。いくら若くとも無理はない。

けれど。引き抜いたペニスはまだ、恋人の暖掌にふわっ、と撫で刺激された。

「おねがいようへい。わたくし、もつともつとビュって欲しいのぉ」

「いつ!? いや、もうムリだから!」

すっかり雌の貌^{かお}になった姫は、まだ満足していない様子である。

ちよつと恐ろしくなつて後退りすると、ドンつと背中が何かにぶつかった。

「っ!? か、カレンさん!？」

「はあ……はあ……擁平、お前という奴は、また姫様を……」

再起したらしい美人侍女は、残つた上着も脱ぎながら、非難めいたことを口にする。

「姫様も、お分かりなのですか？ あなたはアスウルラントの第一王女で——」

「言わないで、カレン」

途中で主に遮られた。そして少女が膝をつくとき、侍女は何も言えなくなつてしまった。

「分かつているわ、そんなこと。けれど……お願い。今は、日本にいる間だけは、擁平だけの女でいたい……」

立ち尽くしたまま一人ついていけない少年の股間に、膝立ちの少女の胸元が寄せられる。何度見ても生唾モノの、丸くてヴォリューム満点の爆乳である。汗に輝く乳白色とツンと尖つた桃色突起が、また何とも官能的だった。

そして白い両掌で持ち上げられると深い谷間が大きく開き、萎えたペニスがゆつくりと挟み込まれていく。

——ぷるんっ、たぶむちゅんっ。

「ああっ!? こ、こんなっ、オッパイでなんて？」

ぴつたりと乳肌が包みこむと、思わず擁平は震えてしまった。豊満な膨らみは手で触る

よりも気持ちよく、ただ乳房を押し付けられただけで蕩けてしまいそうだったのだ。

「お願い擁平、もつと硬くして？ ああ、わたくしのムネで、カチカチにしておえ……！」
エロい乙女となった姫が、ゆつくりと乳房を上下し始める。すると濡れそぼった肉棒が、ぬちゅぬちゅといやらしく擦り上げられていく。

（おおっ気持ち、いいっ！ こ、これがパイズリっ。温かくて、思ってたよりすごい……！）
Fカップもの特盛りバストはあつという間にサオを挟んで見えなくしてしまう。柔らかい肉感が左右から伝わり、まるでツルツルの餅に擦られるようだった。

——ぬちゅっ、ぷちゅっ、たぷちゅっ、ぬたぷちゅるっ……。

「おおお……！ おちんちんが、包まれて、オッパイを感じるう……！」

疲弊した勃起が少しずつ気持ちよくなっていく。サオは精液と愛液でヌメリ、実に滑らかに谷間の奥でシゴかれた。

乙女の脂肪が歪みながら吸い付いてきて、見ているだけでもドキドキしてしまう。豊桃のような二つの丸みは、それこそ弾けるくらいの瑞々しきで溢れていた。

が、三度も果てた男根は、そう簡単には復旧しない。

すると。若い二人を見ていたカレンが、恍惚と諦めを交えたため息を零す。

「姫様……承知しました。そこまで仰るならこのカレン、最後までご一緒させていただきます」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた
従姉妹を護れ!!

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士に
なっていた

〔小説・狩野景 / 挿絵・天鬼とろし〕

思春期なアダムら
アウトサイドピア
爪説◎さかき傘 / 挿絵◎天海雪広



全国書店で
好評
発売中



真夏のキャンプ場で勃発する
天使VS魔族VS人間の
三つどもえバトル!

オトミッコ! 僕は男の巫女娘

〔小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹〕



全国書店で
好評
発売中

男の子と女の子——
二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 幽霊学園戦姫 / プナガツ ①~④
- ビルグリムメイド ①~③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①~④
- 涼風唯らいい面【カースイーター】 ①~②
- 女幹部メル様のカイセキ計画!
- 借金お嬢クリス ①~③
- 無敵の剣士がDMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせは、
メールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!